

平成 26 年度函館市縄文文化特別研究

儀礼の場としての竪穴

—函館市垣ノ島遺跡・八木B遺跡・白尻小学校遺跡の土器供献の位置づけ—

國學院大學栃木短期大学

中村耕作

1. 問題の所在

(1) 縄文的造形の歴史的背景

中空土偶と合掌土偶—北日本の縄文時代後期後半には津軽海峡を挟んだ近接する地域で2つの国宝土偶がつくられた。両者は優れた縄文的造形の代表例であるが、縄文時代においてもこうした優品は普遍的に製作されていたわけではなく、一定の社会的・文化的な脈絡のもとで花開いたと考えられる。具体的には、“縄文のビーナス”の勝坂式期（中期中葉・中部）、“縄文の女神”の大木7～8式（同・南東北）、三内丸山遺跡に代表される円筒上層c～d式（同・東北北部）、“仮面の女神”の堀之内2式～加曽利B1式（後期前葉・中部～西関東）、異形台付土器・釣手土器を生み出した加曽利B2式（後期中葉・東関東）、そして上述の通り2つの国宝を持つ後期後葉の東北北部～道南部などである。

筆者は、浅鉢・注口土器・釣手土器などの「派生器種」（林 1990）の増減や、土器の儀礼利用の観点から検討を加えた結果、派生器種の増加・儀礼利用の盛行が一定の時空間に集中することを明らかにした（中村 2013）。つまり、これらの道具は、歴史的（社会的・文化的）な特性に関わるアイテムと位置づけることが可能である。

(2) 器種の増加と顔面装飾・異形化

上記の造形的発達の時期は、土器への顔面装飾や、既存器種の「異形化」の時期とも重なる（中村 2013・2014）。

深鉢が基本器種の縄文時代にあって、浅鉢・鉢・注口土器など少ないながらも一定の割合で定着する器種と、1時期のみに盛行する器種がある。後者の代表例が有孔罌付土器・釣手土器・香炉形土器・下部単孔土器・異形台付土器・巻貝形土器である。有孔罌付土器は中期前半に出現し、後半には壺へと変化する。釣手土器は中期中葉～後葉の関東～東海・北陸に限定されたのち、後期中葉に東関東で盛行する。同時期には下部単孔土器や異形台付土器が登場し、後期後葉まで東北・北海道に進出する。香炉形土器は後期後葉の北日本で登場し、晩期へと継続する。巻貝形土器は後期後葉の北日本で一時期のみ製作された。

顔面装飾は、中期中葉の関東～中部の「顔面把手」の盛行が著名だが、同時期の青森県、福島県、新潟県などでも少量ながら一定数が知られている。続いて一定数が認められるのが後期後葉の北日本であり、晩期には東北・関東で認められる。

以上のように概観するだけでも、こうした問題において後期後葉の北日本は重要な位置を占めているのである。

(3) 住居床面出土資料の評価

中空土偶が出土した墓坑すなわち葬送儀礼の場が社会的にも重要な意味を持つことは多言を要さない。では、合掌土偶の出土した住居床面についてはどのように理解すべきであろうか。

一般に、縄文時代の竪穴住居床面に完形の土器が遺存することが極めて少ないことは、桐生直彦（1989・1990）による東京都内の床面出土土器や焼失住居の研究、大島直行（1994）の北海道

焼失住居の研究などで知られていた。小林達雄（1965・1974・1987）は、そうした中で浅鉢や注口土器などの特殊な土器が目立つことに注目し「井戸尻パターン」と呼んだ。小林は日常的な活動は住居外で行い、住居内には儀礼に関わる道具のみが置かれていたと考えたが、住居廃絶が突発的なものでないとするれば、床面に遺存する道具立ては廃絶時の選択によるものと理解することも可能である。大島は関東の廃屋墓事例を参考に、住居廃絶儀礼に伴う儀礼行為という仮説を提示し、アイヌの家送り儀礼（久保寺 1956）にも言及している（大島による北海道縄文時代の事例研究については後述）。

近年の焼失住居と土葺屋根の実験を踏まえた研究（村本ほか 2006）によれば、土葺屋根が失火で全焼する可能性は低く、燃料や空気の補充など含めた意図的な焼却行為が行われた可能性が高いことがわかっている。

その理由についてはモノ送りの一環としての住居廃絶の儀礼という理解がある。「儀礼」行為と認定しうるかは別として、住居廃絶時には住居の焼却のほか、炉石の抜き取り、炉を土器で覆うなどの行為が行われていた例があり（金井 1983・1997）、筆者も床面に鈎手土器をもった焼失住居炉内の大形パン状炭化物を廃絶時の供献品とする仮説を提示している（中村 2013）。そして、こうした中に、土器の意図的な配置が散見される訳である。

床面出土土器については全国的な概要をまとめたことがあるが、以下の点が注意される（中村 2010）。

- ・土器の床面出土例が多い時期・地域に偏りがある。
- ・器種の強い限定は認められない。
- ・赤／黒、大／小などの象徴的な対比関係が認められる例が、前期～後期に散見される。

今回、問題とする東北北部もまた、この盛行期の1つであり、合掌土偶もまた焼失住居から土器とともに出土したものである。従って、この時期の造形的発達の背景を理解する鍵の1つが住居床面出土土器の理解ということになる。

北海道については後述するが、事例の多い東北北部では、水木沢遺跡の報告書において、空間利用の観点から床面出土の土器・石器の位置が壁際に寄っていることを指摘しているほか、小林達雄の廃棄パターン論をふまえて出土状況を検討している。完形品・復元可能品が2個体以上床面から出土した6軒のうち、自然堆積する住居4軒では床面出土遺物が多い一方、一次埋没土の上位に土器等が廃棄される2軒は床面出土遺物が少なく倒立しているものが目立つという違いを指摘している。日常で多用される深鉢が少ないという指摘も重要である（古市 1977）。また、馬場瀬遺跡の報告書で床面出土遺物の来歴がモデル化されて検討された上で、「廃絶時に使用されたもので、遺構内に放置されたとみられる」（工藤 1982）と解釈された。しかし、その後はこうした観点からの検討は殆ど行われていない。これは、この地域の床面出土例が極めて多く、いわば普遍的な存在であったことに起因すると思われる。このために当該地域の編年研究は進展したが、隣接地域でも東北中部の貝塚資料や道央部の盛土資料など編年に資する資料が多く、床面出土例の特異性は意識されにくかったものと思われる。

なお、床面出土遺物のほか、一部の覆土出土遺物についても儀礼的遺棄の可能性が指摘される

ことがある。これを含めて、遺物や覆土の堆積については様々な議論と観察が行われており、ここでは立ち入らない。

(4) 廃屋葬の問題

住居廃絶時に遺棄された道具のうち、床面倒置土器について廃屋葬との関係を指摘したのが山本暉久(1976)である。山本は竪穴住居床面で発見される倒置土器を、千葉県の貝塚地帯で人骨頭部にしばしば逆位の土器が被せてある事例と類似するものと考え、西関東・中部などでも廃屋葬が行われていたことを想定した。京葉地域では住居の床面ないし覆土中あるいは覆土を切り込んだ土坑内に埋葬する例があり、廃屋葬・廃屋墓・家屋墓・屋内葬などと呼ばれている(山本1985、堀越1986、高橋1991・2007、花輪1995、四柳2010)。姥山貝塚例などかつては不慮の死体をそのまま放棄したと考えられた遺構もあるが、近年の再検討により葬送儀礼の産物と考えられている。床面から複数の人骨が検出される例については上屋を解体せず「死者の家」として継続利用された可能性があり、「一次埋没土」上の埋葬についても壁面や周堤が崩れたもので、上屋は遺存していたとみる見解がある。一方、一次埋没土の成因を土屋根の崩落とみる見解もあり複雑である。ここで注目しておきたいのは、姥山貝塚例が「葬送」の産物とみる根拠の1つである、人骨を覆ったローム質土の存在である。何らかの理由でローム質土を選んで、屋内の遺体に土を被せた可能性が指摘されている(渡辺2006)。

山田康弘(2001)による人骨集成によると住居内発見の人骨は166例あり大半を千葉・茨城が占める。他地域の例は以下のとおりであるが、各地域・時期でまとまった例が少ないためか、地域文化事象としての本格的検討は行われていない。このほか、八戸市松ヶ崎遺跡31号住居(中期)の例や、最近報告された東京都市谷加賀町二丁目遺跡(中期)での複数例がある。

北海道美々5遺跡(前期) 2体	東京都千鳥久保貝塚(中期) 7体
青森県最花貝塚(中期) 2体	東京都倉輪遺跡(中期) 1体
岩手県上村貝塚(中期) 6体	長野県北村遺跡(後期) 1体
岩手県貝鳥貝塚(晩期) 2体	愛知県林ノ峰貝塚(後期) 1体
埼玉県黒谷貝塚(前期) 1体	静岡県蜷塚貝塚(晩期) 2体
埼玉県水子貝塚(前期) 1体	大分県棒垣遺跡(後期) 3体
埼玉県打越貝塚(前期) 1体	

こうした中、北海道では積極的に廃屋墓の痕跡を検討しようという動きがある。八木B遺跡の報告書(1992年)では、廃棄の際の意図的焼失や土器・土製品を1~数点床面に残すことを「生活儀礼」に関わるものとして注目している。その後、八雲町野田生1遺跡の調査では、屋内から骨片状の堆積、ローム質土のマウンド、赤色顔料、漆塗櫛などが発見され、葬送に関わる可能性が指摘された。これを受けて小杉康(2013)は、周堤墓との系譜的な関係を検討している。つい最近になって、青野友哉(2015)は北海道の墓制を概観する中で、野田生1遺跡例に加え、福島町館崎遺跡の中期中葉住居からの屈葬人骨例や、木古内町札苺7遺跡での住居床面出土の漆塗櫛を挙げて廃屋墓の存在を検討することの重要性を喚起している。この中で重要なのはカリンバ遺跡の坑口部における注口土器と礫のセット関係が野田生1遺跡の床面でも確認できるとい

う指摘である。

このほか、堅穴住居の床面に墓坑を設ける例が複数の地域・時期で確認されているが、北海道では森町森川3遺跡やハマナス野遺跡における前期の事例が「廃屋墓」として知られているほか、臼尻B遺跡の中期の大形住居内のフラスコ状ピットからも合葬骨が出土している（遠藤・鈴木2010）。一方、鈴木克彦（2009）は中期～晩期の東北北部における堅穴内土坑を集成し、墓坑であるという仮説を提示しているものの、残念ながら他の根拠を挙げていないので説得力に乏しいと言わざるを得ない。

（５）本研究の課題

このように後期後葉の北日本は、土器の儀礼利用と儀礼の場としての堅穴の研究において重要な位置を占めている。本研究では、この両者を検討するため、①道南部における堅穴住居の儀礼的要素、②道央部～東北地方における床面出土土器の2点に焦点を絞り検討を加える。

2. 土器編年と時期区分

本稿では、青森県を中心に構築された十腰内編年（今井・磯崎1968）をベースとする編年案を用いる。特に北海道や東北南部も含めた検討を行っている鈴木克彦（1996・1998・2001）の編年案、『青森県史』で採用された関根達人の編年案（関根2005・2013）、広域編年の基準となっている東北中部の資料をベースとした小林圭一（2008）の瘤付土器編年、近年の中門亮太（2013）による瘤付土器の編年案などを、青森県史編年の5期～7期（十腰内Ⅱ群～Ⅴ群）と対比したのが第1表である。7期は第1段階～第4段階に細分されているが、ここでは7-1期～7-4期と略称する。各氏の編年案は細部に異同があり、また注口土器は文様の先取性が指摘されているが（中門2007）、バリエーションが少なく安定した変遷をたどる注口土器をもとに、共伴する深鉢などを加味して時期を判定した。

北海道南部においては、中葉：手稲式・鯨間式・エリモB式、後葉：堂林式・三ツ谷式とする報告書が多いが、道南部においては「エリモB式」とされる住居の報告例がないため、鈴木克彦（1999a・1999b・2001）による八木B式・臼尻式・浜松2式の編年案を4～6期に対比させた。但し、鈴木の注口土器編年図（1998：図7・2001：図90・2007：第13図）では八木B

第1表 東北北部主要編年対比表（中門2013を参考に作成）

青森県史 （関根2013）	関根達人 （2005）	鈴木克彦 （1998・2001・2003）	小林圭一 （2008・2014）	村木淳 （2006）	中門亮太 （2013）	主要基準資料
5期（十腰内Ⅲ群）	-	十腰内3式 （宮戸2b式並行）	宝ヶ峯3式 （十腰内3式）	A類	-	風張45住 王ノ壇Ⅳ区・Ⅴ区Ⅶ層
6期（十腰内Ⅳ群）	十腰内Ⅳ群 （西ノ浜式並行）	十腰内4式	瘤付土器 第Ⅰ段階古相 （十腰内4式古）		B類	1期
7期 （十腰内Ⅴ群）	第1段階 馬場瀬段階	十腰内5a式	第Ⅰ段階新相 （十腰内4式新）	C類		2期
	第2段階 中屋敷段階	十腰内5b式	第Ⅱ段階 （十腰内5式古）		風張5住・根井1住 中屋敷SI01	
	第3段階 滝端段階	風張式	第Ⅲ段階	D類	3・4期	風張7住・道路32住・63住 滝端H9-4住、田柄Ⅴ群
第4段階 （未命名）	大湊近川式	第Ⅳ段階	-	5期	風張75住・148住 田柄Ⅵ群	
8期（十腰内Ⅵ群）	駒板段階	十腰内6式 （駒板式・家の後式）	第Ⅳ段階	-	6期	田柄Ⅶ群 駒板ⅢC87-5ピット

遺跡 HP4 床面出土注口土器を十腰内 3 式（本稿の 5 期）並行の「鯨間式」に置いている。ここでは、土器群の詳しい検討が行われた 1999 年論文をもとに話を進める。

東北北部と北海道南部の対応関係については、鈴木と関根が 7-1 期からを堂林式とするのに対し、小林は 6 期からとするが、そもそも風張(1)遺跡 15 住出土土器群の評価をめぐって、7-1 期の段階を設ける鈴木案・関根案と設けない小林案との違いがある。本稿では 7-1 期からを堂林式としておく。鈴木克彦は堂林式並行期に釜谷 2 式を置くが細別は行っていない。堂林式の細分案はキウス 4 遺跡の 3 細分案が支持を得ており、それをもとにした阿部明義（2008）の編年がある。問題は、関根が 7-1 期～7-3 期を堂林式古～新に対応させ、小林も 7-3 期（瘤付土器第Ⅱ段階）を堂林式新段階に対比させる一方、阿部は堂林式中段階を鈴木の十腰内 5 式・風張式（本稿の 7-1 期～7-3 期）に対応させている点である。阿部の編年図に示された北斗市矢不來 7 遺跡の例を見る限り、「中段階」の資料が出土している H1・H3 では 7-3 期の注口土器が出土している。本稿では東北北部と直接対比できる文様を持った注口土器をもとに時期を判定し、そうしたものがない場合は、深鉢文様をもとに、堂林式古段階を 7-1 期、中段階を 7-2～7-3 期としておく。

3. 道南部における竪穴住居の儀礼的要素

（1）野田生 1 遺跡

まず、最初に儀礼的要素が報告された野田生 1 遺跡の報告書において注意された事項を確認する（藤井 2003）。

ここでは、Ⅱ層（Ko-d 火山灰層：1640 年）の下面＝Ⅲ層上面の遺構確認時の落ち込みに 4 つのパターンが見いだされた。このことは、17 世紀まで竪穴が埋まりきっていなかったことを示すが、落ち込みのパターンの違いについては、人為的な堆積の程度の違いによるものと考察された。すなわち、竪穴の周縁部分のみが堆積されているもの（A・B）、中心部分まで堆積しているもの（M）、確認面がⅣ層まで下がるもの（Ⅲ層が全面を覆う、または自然堆積：C）である。

住居床面では、完形状態（倒立、横倒し、正置）、集中破片が区別された。またこれらの中に、口縁部や注口部が打ち欠かれ、別の遺構に移動している現象も指摘されている。

覆土中遺物については、多いものと少ないものがあるが、床面の土器の状態とのはっきりした関係は指摘されていない。

土器の接合については、A：隣接する竪穴間で覆土と床面の土器が接合するパターン、B：やや離れた包含層の遺物と竪穴住居跡の土器が接合するパターン、C：覆土上層において多遺構間で接合するものが区別された。

盛土墓の可能性を検討するため、土壌のリン分析が実施されたが、富化が認められたものと認められないものの両者の存在が報告されている。

このような調査・分析の結果、床面や覆土内での二次的利用の存在が指摘されたのである。

土器は、復元個体の中で注口土器の占める割合が 2 割弱と高いこと、多遺構間接合のものゝ殆どが赤彩土器であること、完形状態での出土のうち倒立 4 軒 6 個、横倒し 5 軒 7 個、正置 4 軒 4 個、集中破片 11 軒 16 個である一方、個体の出土しない住居も 3 軒あること、完形のうち口縁を打ち欠いたものがあること、ほとんどが東壁際から出土していること、覆土中の遺物が多い住居と少ない住居があることなどが指摘された。接合関係では、隣接する竪穴間での覆土

と床面、やや離れた包含層と竪穴内、多遺構の覆土上層間、などのパターンが認識された。これらの成果から少なくとも新旧2段階の時間差の存在が指摘された。

但し、以上の「整理と考察」の中では、廃屋墓の可能性は明言されていない。廃屋墓の可能性はMP1の報告部分で検討されている。種市幸生執筆の記載では、MP1の調査中ローム土がマウンド状に堆積することが確認され、その後のAH11の赤彩土器や、AH6の漆塗櫛の出土から、「盛土墓」の可能性を意識した調査が行われたことが明記されている。この黄褐色ローム土が、マウンド状に堆積するのは9軒存在する。「盛土墓」は『美沢川流域の遺跡群Ⅶ』において使用されたものとし、「土壌墓一極主義的研究に注意を促す意義をもっている」と重要な評価をしている。

このほか、藤井浩執筆のAH1の覆土中の礫、AH3の覆土中の礫やベンガラ、AH6の覆土中の漆塗櫛、AH10・AH12の倒立土器やマウンド状堆積、AH11の赤彩注口土器と鉢、AH15・16・20のマウンド状堆積、BH23・CH32の倒立・横倒し土器、MP2の完形土器や陰陽一對の礫、などの例については「(墓などの)二次的な利用の際に配置された可能性」が指摘されている。一方、福井淳一執筆のAH5でのベンガラや粘土の出土例やAH7・AH9のベンガラ散布、MP5での倒立土器・ベンガラ塊・アスファルト塊などの例は「廃屋墓として利用された可能性」と明言されている。なお、MP2の陰陽の礫とは、床面に「棒状円礫と円形のくぼみを持つ台石が対に並んで配置されていた」事例である。

(2) 周辺遺跡における特徴的要素

野田生1遺跡での指摘をふまえ、南茅部地域を中心とする道南部の竪穴について報告書の記載を改めて整理した。マウンド状堆積は他の遺跡では確認されていないが、臼尻小学校遺跡などでは、赤色顔料や漆塗櫛など、野田生1遺跡同様の事例が検出されているほか、グリーンタフの塊がしばしば確認されている。これらは、住居の壁際で検出されることが多く、後述する床面出土土器のあり方に近い。

漆塗櫛は豊崎B遺跡PD-25(7-2期?)と臼尻小学校H-54(5期)で出土しているが、ともに土器を伴う。赤色顔料は9軒から検出されているが豊崎B遺跡PD-25を含む5軒は土器を伴う。詳細は未報告であるが、木古内町札苺7遺跡(「堂林式期」)でも床面から土器とともに漆塗櫛の出土が速報されている。

しかし、漆塗櫛や赤色顔料と土器が同じ位置から出土しているものは少ない。このことは、仮に前者が遺体に直接接していたものとした場合、供献された土器は必ずしも遺体に添えられたものではないことを物語る。前述の通り青野友哉は野田生1遺跡の土器と礫の組み合わせがカリンバ遺跡の「坑口部副葬」と同種のものとして指摘している。カリンバ遺跡は後期末の御殿山式期の事例であるが、それ以前の道央部の周堤墓にも認められるので、遺体とやや離れて土器を供献するものとみることは可能であろう。

臼尻C遺跡H-2では、赤色顔料が壁際を一周するように散布されたほか、炉脇でも確認されている。同住居では筒状容器らしい漆製品も出土している。

(3) 北海道における焼失住居

大島直行(1994)の研究は全道を東北/西南に分割し、大別ないし各期を2分する時間幅での総合的な検討であるが、集計結果をみると、後期後半の焼失住居出現率が14.72%(29/197

軒)であり他の時期を大きく上回ることが明らかにされている(北海道全時期では5.20%、後期全体では10.46%:55/526軒)。また、完形土器の保有率は中期7.8%、後期20.8%である。大島は詳細な背景については言及していないが、この時期への集中について統計学的に有為なものともみえており、改めて注目される。

その後、道内の焼失住居(火災住居)については村本周三(2007)が擦文時代までを含めた集成研究を行っている。後期については99/684軒(14.47%)であり、村本の集成や他地域の中期の集成研究の中でも突出している。村本は中期柏木川式期、後期余市・北筒Ⅲ式期、手稲〜堂林式期に多いことを指摘している。

しかし、この時期に特徴的な焼失住居と、前述の赤色顔料等が同一住居で認められるのは豊崎B遺跡PD-14(7-2期)の1軒のみである。有機質資料である漆塗櫛同様、焼失して検出できない可能性は高いが、いずれにしても有為な関係性を指摘することはできない。

床面出土土器と焼失住居の関係をみると、南茅部地区の113軒のうち、焼失住居は26軒である。このうち床面から土器が出土するのは12軒で46%、逆に床面出土土器を持つ住居は53軒でこのうち焼失12例は22%である。

4. 北日本における床面出土土器の様相

(1) 事例の時間的・空間的分布

前述のように後期後葉の道南部・東北北部における床面出土土器は他の時期・地域を大きく上回っており、既に編年研究の素材として多くの例が集成されている。それらの研究はセット関係の把握や層位・切り合い関係などによる新旧差の把握を目的としたものであるが、本稿では、その時期的・地域的多寡や器種構成などの面から改めて検討を加えたい。事例集成にあたっては國學院大學が所蔵する発掘調査報告書の悉皆的調査に、鈴木克彦をはじめとするこれまでの編年研究で提示された國學院大學未所蔵図書を加えた。

対象は、北海道南部〜東北地方の4期〜7期、器形が半分以上復元された実測図が提示され、床面・床面直上と明記されたものもしくは写真からそれと判断できるものとし、図無文または縄文のみで詳細時期不明なものを含めて約230軒・約530個を集成した。

全体の住居数・個体数をみると、7-1期と7-4期が15軒以下で少なく7-3期が50軒を超えて多いものの、他の時期は30軒前後と比較的安定している。1軒当たりの平均個数も多少の変化はあるものの2個前後と大きな動きは見られない。

器種別の動きをみると、4期の深鉢・浅鉢を中心に壺が続く状況から、5期には鉢・高杯が加わり、7-2期には注口土器が最も多くなる。希少な器種をみると5期の異形台付土器と7-3期をピークとする香炉形土器が注意される。

こうした動きの地域的な違いを確認するために、北海道と青森県に限って検討すると、まず事例数のピークが異なることが注意される。北海道では野田生1遺跡などを典型とする6期(いわゆるホッケマ式期)の例が約40軒と多く、7期(堂林式)の例が続く。注口土器の比率が高いのも大きな特徴であろう。これに対し、青森県でのピークは7期(特に7-3期に約30軒)にあることと、次に多いのが5期という特徴がある。各時期の時期幅が不明なことから時期的な増減については言及できないが、地域によってピークが異なることは重要である。

(2) 土器以外の要素との関係

先に北海道の事例で注目した特殊な要素との関係については以下の通りである。

焼失住居における床面出土例は 29 軒確認されたが、このうち 23 軒は北海道の事例である。他の例は時期的・地域的なまとまりに乏しく、土器の床面出土例との相関関係は認められない。

漆塗櫛を含む装身具との共伴例は認められない。

(炭化) 堅果類は、大日向Ⅱ遺跡 SA06・SA64 に例があるが、詳細は不明である。

北海道で見られなかった特殊例のうち最大のものは、風張(1)遺跡での国宝合掌土偶(6~7-1期)と重文類杖土偶(5期)との共伴例である。しかしながら、床面での土偶との共伴例はこの2軒のみであり、一般化は難しい。

また、砂沢遺跡2b号住居址では、炉の隅を切る形で土坑が検出されており、無文の壺と縄文のみの深鉢が出土している。「深鉢は壺の上に被せられていたようである」とされており、盛土を持つ土器棺墓の可能性が指摘されている。

このほか、岩手県根貝塚において、下部単孔土器からへビの骨が検出されたという報告があり注目されている。但し、これが縄文時代のものかどうかは疑義もあり、年代測定の実施が望まれる。

5. 墓坑との比較

(1) 当該期の墓坑出土遺物

当該期の墓坑の可能性が高い土坑が、八雲町浜松2遺跡、函館市八木B遺跡・白尻C遺跡・白尻小学校遺跡・著保内野遺跡、八戸市風張(1)遺跡などから検出されている。このうち、土器の出土から時期が特定できるのは以下のとおりである。

浜松2遺跡(1990年調査区)では、4号配石遺構方形の土坑内に石が敷き詰められ、その1隅より正位で深鉢(6期)が検出されている。同遺跡7号配石遺構では、土坑内から6期の深鉢1点と石鏃1点、玉2点が出土した。このほか同遺跡では石鏃と玉(6号配石)、石鏃のみ(3号配石)の例がある。

八木B遺跡では小破片を伴う方形配石土坑(配石1)が検出されているほか、土器の出土は無いが同様の方形配石土坑(配石2)と形状不明の配石(配石3)が検出されており、配石3からはヒスイ製勾玉1点・「蛇紋岩」製平玉2点が出土している。配石1の小破片は4期の可能性が高い。

白尻小学校遺跡では1969年の調査で方形配石土坑が検出されている。出土した土器片は5期に位置づけられよう。また、近年の調査では3期の土坑墓が多く検出されているが、GP-7で4期の土器破片と石鏃・石匙・石錐・磨石、GP-9・GP-15で4期の土器破片、GP-10で5期の土器破片、GP-16では5期の土器破片とともに石鏃・サメの歯などが出土している。

白尻C遺跡では4期の土器破片と若干の石器を伴う土坑が8基のほか、7-2期頃の深鉢と磨製石斧を伴うP-17がある。

著保内野遺跡では国宝中空土偶の出土したGP-1をはじめ3期の墓坑が確認されているが、土器は出土していない。ヒスイ玉の出土したGP-2の漆片の年代測定値は3270±40BPである。中空土偶の時期については諸説があるが(安孫子1992、鈴木2003b、土肥2010、阿部ほか

2013)、國木田大(2013)の集計では堂林式の開始期が3270BP前後なのGP-2については6～7期の所産と考えられる。

風張遺跡では130基が土坑墓として認定された、13基に赤色顔料、20基から玉類が出土している(一部重複)が、器形が復元できる土器は伴っていない。報告書では切り合いや覆土の小破片をもとに1基を後期中葉(5期～7-2期)、15基を後葉(7-3期)に位置づけている。

(2) 床面出土土器との比較

以上のように、墓坑内から土器が出土する例は極めて少なく、住居との同時期性の検討は困難である。完形土器の出土例は浜松2遺跡の深鉢のみである。今回、床面出土資料の石器については検討していないが、この時期の墓坑に副葬されるものの多くは石鏃などの石器か玉類に限定される。床面からは漆塗櫛の出土は知られているものの、玉類の出土例は見られないので、被葬者の性格が異なっていた可能性も考慮すべきかもしれない。

一方、道央部の堂林式期(7期)に盛行する周堤墓では、墓坑上面に注口土器、鉢などが供献されている例が多い。林謙作は器種の違いを被葬者の性格の違いとして理解する仮説を提示しているが、最も多いのは注口土器である。青野友哉(2015)が類似性を強調したように、東北北部と比べても道南部の床面出土土器に注口土器が多いのは、周堤墓供献土器との関連性の強さを示しているものと思われる。

6. 考 察

(1) 歴史的脈絡

本稿では、後期後葉の北海道南部～東北北部における土器の儀礼利用・特殊土器の盛行に注目し、道南部における廃屋墓の可能性が指摘される堅穴内マウンド・赤色顔料・櫛などの状況を整理したうえで、これらと関連する可能性が高い堅穴床面からの土器の出土例を検討した。

床面出土土器は4期から認められるが(本稿の対象外の3期にも認められる)、6期～7期が最盛期である。しかし、北海道と青森県を比較すると、6期にピークを迎える北海道と7-3期にピークを迎える青森という顕著な違いが明らかになった。

これを地域別の脈絡で解釈すると以下ようになる。道南部では後期前葉(3期)に東北北部の影響下で環状列石が発達し、4期には配石墓が盛行する。このうち、7期には道央部で周堤墓が顕在化する。こうなると、野田生1遺跡の6期を中心とする「廃屋墓」はこの空白に位置づけられることとなる。小杉康(2013)は野田生1遺跡に代表される廃屋墓を「野田生型家屋墓」と命名し、後期前半期(堂林式期以前)における「小牧野型環状列石」に伴う多様な墓制の一類型としての位置づけた上で、周堤墓が盛行する道央部にも家屋墓が存在していることに注意し、堅穴住居をモデルとしたとする説(大塚1979、春成1983)をふまえて、周堤墓の成立を論じた。その後の合葬墓(青野2013)を含め、「堅穴」と葬制の強い関係をうかがわせる。

一方、東北北部では6期～7-1期における萌芽期を経て7-2～7-3期には、香炉形土器の盛行、異形注口土器・巻貝形土器の盛行、顔面装飾付土器の出現といった現象が集中的に出現し、これに土器の床面出土例のピークが重なる。何らかの社会の複雑化に対応するアイテム・行為の複雑化の一つとして位置づけることが可能である。

問題は、津軽海峡を隔てた道南部と東北北部の関係性である。早期の吹切沢系貝殻沈線文系土器以来一体的な文化圏を形成してきたとされる（富樫 2008 など）両地域において、なぜ文化現象のピークが異なるのかは検討を要する問題である。

6期以降に床面出土例が増加する注口土器をみると（鈴木 2007）、両者は異なった型式を擁しており、特に鈴木は堂林式期（7期）の北海道の注口土器の独自性に注目している。一方、広域で同一型式が認められる例として微隆線文土器群（阿部 2012）があり、特に古段階（6～7-2期）の例が同時期の野田生1遺跡や秋田県漆下遺跡、岩手県長倉I遺跡でみられる。しかし、野田生1遺跡において床面出土例が多い一方、漆下遺跡や長倉I遺跡では香炉形土器をはじめとした特殊器種が多い割には斜面の捨て場からの出土例が多く、やはり、最終的な使用方法の点で違いが認められる。

では、こうした共通するアイテムと、使用方法の違いという点こそが、両地域の共通点と差異点ということになるのだろうか、言い換えれば、東北北部では一段階遅れて床面への供献を採用したのか、ということになる。この点、6～7-1期の国宝合掌土偶を伴う風張15住の例は示唆的である。国宝という現代の価値基準を別としても完形の大形土偶と土器を床面に供献する事例が既に道南部の盛行期と同時期に認められるということは、両地域でともに、床面への土器供献が重視されたことを物語る。すなわち、ピークの差異は住居数または、その検出数に左右されている可能性が高いのではないかと考えられる。東北北部では他の現象とともに7-3期にピークを迎えることになったと理解することが妥当と考える。

（2）象徴的脈絡

器物配置の象徴性

著保内野と風張の国宝土偶については、土肥孝（2010）によって中空／中実、立像／座像、仮面なし／あり、性器なし／あり（著保内の例を注口土器の延長とみた場合は男／女）、墓／住居、打ち欠いて遺棄／再接合して完形といった対比関係が指摘されている。おそらく6期～7-2期のうちのほぼ同時期に価値観を共有していた可能性は高い。このことは小杉の指摘通り、葬送の場が土坑や廃屋など複数存在していたこと、そして土肥の解釈を援用すればその選択は二項原理にもとづいたものであったことになる。

なお、土肥は注口土器との関連で著保内野例に男性格を見出しているが、阿部千春（2010・2015）は原田昌幸（2007）の「性を超越した造形物」への変化という論を踏まえて「二重の性」として位置づけ、その時期的な背景を問う必要を指摘している。

これに関連して床面出土土器の象徴的選択性について触れておきたい。今日われわれが認識できるのは、4期の八木B遺跡における注口土器と下部単孔土器にみえる男女の性象徴の対比（渡辺 1999・2007、阿部 2015）、6期の野田生1遺跡における赤と黒の対比（安斎 2008）や注口土器の注口部・頂部装飾の打ち欠きなどに限られるが、単に土器を床面に供献するだけではなく、その土器の選択には意味があった可能性が高い。

八木B遺跡HP-4の注口土器と下部単孔土器については、近年、阿部千春（2015）によって黒／赤、突起偶数／奇数、文様構造奇数／偶数、原体LR／RLという差異も見出されている。但し、本研究において八木B遺跡資料を実見した際、覆土中の「白い」注口土器胴部破片の存在に気付いた。下部単孔土器には赤色顔料が残り、注口土器は明らかに黒色処理されているのに比べると、胎土の白さのみだが、床面の赤／黒とともに注目しておきたい。

なお、野田生1遺跡 AH11 の例は筆者自身を含むカラー写真での紹介で赤／黒の対比が周知されたが、実見すると写真ほどには黒くはない。しかし、スス・コゲの付着は顕著であり、黒が意図された可能性は高いものと考えている。

また、先に検討したように細かい時期は不明なものの墓坑出土遺物の中に、住居からは出土しない玉類が存在することも同じように二項対立的世界観として解釈可能である。

なお、縄文世界における二項対立・二元的要素については、集落・住居・墓域の構成と遺物の分布、抜歯、性象徴、土器の造形的特徴などに関し、水野正好（1969）、春成秀爾（1973・2002・2013ほか）、林謙作（1977・1979ほか）、小林達雄（1988・1993）、渡辺誠（1989）、谷口康浩（2005・2006・2010・2011）、嶋崎弘之（2008）など多くの検討がある。筆者も関東後期中葉の異形台付土器や中部中期の釣手土器の二個体共伴例における様々な造形上の差異を確認しており（中村 2012・2013）、こうした違いは意図的なものと考えている。

竪穴住居の象徴性

本稿では、ローム土の盛土、土器供献などの点で他の時期・地域と著しく区別される北日本の個性を、歴史的な背景とともに説明すべきだという立場からの検討を行ってきた。

こうした視点は、竪穴内の象徴的施設・器物の配置状況から関東中部における中期前半の左右の空間分節から後半での内外境界への意識への変化を指摘した谷口康浩（2010）の研究を踏まえたものであり、また土器の象徴性・身体性をめぐって、相対的正面・絶対的正面・人体メタファーなどを区別してその到達度を問題とする小杉康（2006）の議論を意識したものである（土器の象徴性・身体性をめぐると同種の議論については、中村 2013・2014）。

一方、こうした歴史的個性とは逆に、人類としての共通の認識・感覚を重視する立場がある。本稿に関わる点では、大地を穿った穴としての「竪穴」自体が有する象徴性について、曾利式期の住居を母胎に見立てたとする田中基（1984）や樋口誠司（1989）、それを引き継ぐ大島直行（2014）の見解がある。また、住居の各部位を身体（全身とその部位）に見立てるという民族誌事例を引いた上で炉・住居・集落・土器などに共通する世界観の描出を読み取る榎原功一（2009）や、「容器」としての各空間の共通性を指摘する石井匠（2010）の見解もある。特定の歴史背景や、「住居」としての空間利用をふまえた議論とは両輪をなすものである。

（3）儀礼の場としての北日本縄文時代後期後半の竪穴

以上の検討をふまえて、改めて北日本の縄文時代後期後半の儀礼の場としての竪穴の位置づけを検討する。北海道南部における①漆櫛や②ロームマウンドなどの事例が葬送（廃屋葬）に関わる可能性は先行研究の指摘する通り高いものと考えられる。これに、③土器や④礫、⑤赤色顔料の配置、⑥竪穴の焼却、⑦埋め戻しなどの行為が関わってくる。①～⑦を完備したものは殆ど認められないので、これらの行為のいくつかが選択されたようである。問題は、①・②を伴わない、③～⑦の行為儀礼行為として認められるかどうかである。北海道においては、③のうち、八木B遺跡や野田生1遺跡での特徴的な組み合わせが注目されてきた。

これをうけて、本稿では特に③を重視して東北北部の事例を含めた検討を行ったが、結果として北海道以外では①・②・⑤・⑥などの特徴的要素との関係性は薄いことが判明した。国宝合掌土偶との共伴例がほぼ唯一の特殊事例である。また、野田生1遺跡、白尻C・白尻小学校遺跡、風張遺跡、大日向Ⅱ遺跡をはじめ、遺跡内の多くの竪穴の床面から複数の土器が出土する状況は、関東などの例で想定していた「床面出土土器の希少性すなわち儀礼行為の可能性」

という説明も成立困難である。この点に関しては、本稿で扱わなかった床面出土石器の組成に違いがあるか、あるいは土器・石器の配置に規則性（並列・対置など）が認められるか、といった項目も検討することが必要であるが今後の課題としたい。

道南部と東北北部には共通する土器様式が分布する一方、今回の扱った現象のいくつかに差異が認められることを指摘してきた。このことは、床面に土器を配置したまま立ち去るという行為が、宝ヶ峯・瘤付土器様式圏においてはその様式を用いることと同じ程度の共通認識であったことをうかがわせる。

ここで注目するのが床面出土土器の器種である。事例数の増加する6期の北海道、7期の東北北部において最も多く用いられたのは注口土器である。今回対象とした床面出土例のほか、覆土出土例や捨て場出土例などを含めて、この時期の注口土器の復元可能個体の出土例は多い印象があるが、日常的に深鉢・鉢を凌駕する量を使用していたとは考え難く、水木沢遺跡報告書での古市豊司の指摘にもあるように、床面への配置は意図的な選択の結果と判断できる。このことは、単に日常的に使用していた土器の全てを置き去るのではなく、我々にはうかがい知れない何らかの象徴的思考が働いた上での土器選択を示唆するものであり、儀礼行為とみなしうる。

これが道南部にみられた廃屋葬と直接的なかわりを持つもの、すなわち土器自体の副葬あるいは死者への食物供献を意味するかはなお検討の余地がある。東北北部において葬送を示唆する要素が確認できない以上、死者とは無関係に住居廃絶に関わる儀礼行為の一環として配置された可能性も考慮すべきである。既にみたように土器と装身具やロームブロックが近接して検出される例は少ないが、このことだけでは判断できない。今後の課題としたい。

謝 辞

本稿は平成26年度函館市縄文文化特別研究「儀礼の場としての堅穴」の成果報告である。こうした研究助成による検討の機会をいただき、具体的な資料調査として函館市縄文文化交流センターおよび北海道埋蔵文化財センターにおいて関連する土器群を観察できたこと、その際に各遺跡の状況について阿部千春氏・福田裕二氏・吉田力氏・藤井浩氏より教示を得たことは有難い経験となった。資料収集・調査では青野智哉氏・高橋毅氏・加藤渉氏にもお世話いただいた。但し、今回のテーマは博士論文以来継続して関心を持ってきた「土器が堅穴住居床面から出土する現象」に係るものであり、本稿の視点・解釈は、國學院大學オープンリサーチセンター整備事業、2009年度以来の高梨学術奨励基金による研究助成、岩手県一戸町による御所野縄文博物館嘱託研究員制度、國學院大學特別推進研究などによる北海道・東北地方各地での資料調査・研究の成果を多分に含んでおり、そうした積み重ねが本研究の採択につながったものと考えている。これらの研究でお世話になった皆様にも感謝申し上げます。

資料収集・図版作成協力：松政里奈（2011年度・2012年度國學院大學特別推進研究）、伊地知遥・猪熊花那子・大木美南・木下菜月・高田大幹・中村萌・室井千堯（2013年度高梨学術奨励基金）、佐藤拓也・入江直毅・小林美貴・伊沢加奈子（2014年度函館市縄文文化特別研究）

引用参考文献

- 青野友哉 2015 「北海道における縄文墓制」『季刊考古学』第130号
- 安孫子昭二 1992 「田端東遺跡出土土偶の意味するもの」『東北文化論のための先史学歴史学論集』加藤稔先生還暦記念会
- 阿部明義 2008 「堂林式・御殿山式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 阿部明義 2012 「縄文後期後半の微隆線土器の様相」『千葉大学文学部考古学研究室30周年記念 考古学論攷 I -岡本東三先生退職とともに-』六一書房
- 阿部千春 2015 「マルチ・ジェンダーな遺物を生んだ縄文人の思考 -著保内野遺跡の土偶と八木B遺跡の土器」『季刊東北学05』
- 阿部千春・西脇対名夫・竹田幸司 2013 「蔵王町下別当遺跡の「人面装飾土器」 -特に著保内野遺跡出土国宝「土偶」との比較から-」『仙台市博物館調査研究報告』第32・33合併号
- 石井 匠 2010 「縄文時代における空間認識とモノづくり」『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究報告』第2号
- 今井富士雄・磯崎正彦 1968 「十腰内遺跡」『岩木山』弘前市教育委員会
- 遠藤香澄・鈴木克彦 2010 「北海道南部の縄文集落の葬墓制」『シリーズ縄文集落の多様性II 葬墓制』雄山閣
- 大島直行 1994 「縄文時代の火災住居 -北海道を中心として-」『考古学雑誌』第80巻第1号
- 大島直行 2014 『月と蛇の縄文人』寿郎社
- 大塚和義 1979 「縄文時代の葬制」『日本考古学を学ぶ3』有斐閣
- 長田友也 2008 「元屋敷遺跡出土の巻貝形土器について」『三面川流域の考古学』第5号
- 長田友也 2013 「元屋敷遺跡出土の土製中空人頭部片」『三面川流域の考古学』第11号
- 金井安子 1983 「縄文時代における廃屋の一様相 -竪穴住居址覆土中の集積遺構をめぐって-」『長野県考古学会誌』47号、
- 金井安子 1997 「縄文人と住まい -炉の処理をめぐって-」『青山考古』第14号
- 櫛原功一 2009 「北陸・中部地方の縄文集落と世界観」『シリーズ縄文集落の多様性I 集落の変遷と地域性』雄山閣
- 工藤 大 1982 「調査の成果」『馬場瀬遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第70集、青森県教育委員会
- 國木田大 2011 「北海道における縄文時代年代研究の現状と課題」『北海道考古学会2011年度研究大会 北海道の縄文文化研究の今』
- 久保寺逸彦 1956 「北海道アイヌの葬制 -沙流アイヌを中心として-」『民族学研究』第20巻1号
- 小杉 康 2006 「土器造形の発達とカテゴリー操作」『心と形の考古学 認知考古学の冒険』同成社
- 小杉 康 2013 「大規模記念物と北海道縄文後期の地域社会について」『北海道考古学』第49輯、35-49頁
- 小林圭一 2008 「瘤付土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 小林圭一 2014 「合掌土偶の編年的位置について」『第11回土偶研究会 八戸市大会資料』
- 小林達雄 1965 「遺物埋没状態及びそれに派生する問題（土器廃絶処分の問題）」『米島貝塚』庄和町教育委員会

- 小林達雄 1974 「縄文世界における土器の廃棄について」『国史学』93号
- 小林達雄 1987 「縄文時代の居住空間」『國學院大學大学院紀要 文学研究科』第19輯
- 小林達雄 1988 「二項対立の世界観」『古代史復元3』講談社
- 小林達雄 1993 「縄文集団における二者の対立と合一性」『論苑考古学』天山舎
- 小林達雄 2008 「縄文土器の個性と主体性」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 佐々木藤雄 2011 「縄文時代の二つの「死者の家」－廃屋墓と埋葬専用家屋－」『異貌』29
- 嶋崎弘之 2008 「縄文人の性行動」『埼玉考古』43
- 鈴木克彦 1997 「東北地方北部における十腰内式土器様式の編年学的研究3－十腰内5式以降、後期終末型式の研究－」『北奥古代文化』第26号
- 鈴木克彦 1998 「東北地方北部における十腰内式土器様式の編年学的研究2（上）・（下）－十腰内3、4、5式土器の研究－」『考古学雑誌』第83巻第2号・同第3号
- 鈴木克彦 1999a 「北海道渡島・桧山地域の後期前～中葉の編年－北海道西南部の縄文後期の編年学的研究2－」『國學院大學考古学資料館紀要』第15輯
- 鈴木克彦 1999b 「北海道渡島・桧山地域の後期後半の編年－北海道西南部の縄文後期の編年学的研究3－」『古代』第107号
- 鈴木克彦 2001 『北日本の縄文後期土器編年の研究』雄山閣
- 鈴木克彦 2003 「宝ヶ峯式土器の研究－宝ヶ峯様式の細別－」『縄文時代』第14号
- 鈴木克彦 2003b 「後期 中空土偶（北海道南茅部町著保内野遺跡）」『国華』第1293号
- 鈴木克彦 2007 『注口土器の集成研究』雄山閣
- 鈴木克彦 2009 「東北北部の竪穴内土坑（墓）」『北海道考古学』第45輯
- 鈴木克彦 2010 「東北地方北部の縄文集落の葬墓制」『シリーズ縄文集落の多様性Ⅱ 葬墓制』雄山閣
- 関根達人 2004 「本州出土の突瘤文・刺突文系土器群とその意味」『人文社会論叢（人文科学篇）』第12号、弘前大学人文学部
- 関根達人 2005 「「十腰内Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ群土器」に関する今日理解」『北奥の考古学 葛西勵先生還暦記念論文集』葛西勵先生還暦記念論文集刊行会
- 関根達人 2013 「土器の編年」『青森県史 資料編考古2 縄文後期・晩期』青森県
- 高橋龍三郎 1991 「縄文時代の墓制」『原始・古代日本の墓制』同成社
- 高橋龍三郎 2007 「関東地方中期の廃屋墓」『縄文時代の考古学9』同成社
- 谷口康浩 2005 『環状集落と縄文社会構造』学生社
- 谷口康浩 2006 「石棒と石皿－象徴的生殖行為のコンテクスト－」『考古学』Ⅳ
- 谷口康浩 2010 「縄文時代竪穴住居にみる屋内空間のシンボリズム」『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』第2号
- 谷口康浩 2011 「縄文土器の造形から読む縄文人の心」『第29回特別展 縄文土器名宝展－縄文芸術の到達点－』山梨県立考古博物館
- 田中 基 1984 「呼吸する縄文家屋－母胎としての家－」『ライフサイエンス』第11巻第9号
- 土肥 孝 2010 「著保内野と風張（津軽海峡の南北地から出土した土偶）」『月刊考古学ジャーナル』第595号
- 中門亮太 2007 「注口土器に見る文様の先取性」『遡航』第25号
- 中門亮太 2011 「東北地方北部における瘤付土器の編年研究」『早稲田大学大学院文学研究科

紀要 第4分冊』第56輯

- 中門亮太 2013 「東北地方北部における瘤付土器の基礎的研究」『古代』第131号
- 中村耕作 2010 「住居廃絶儀礼における縄文土器」『日本基層文化論叢』雄山閣
- 中村耕作 2011 「岩手県における縄文時代中期後半の住居床面出土土器」『平成22年度一戸町文化財年報』
- 中村耕作 2012 「縄文土器の儀礼利用と象徴操作」『縄文土器を読む』アム・プロモーション
- 中村耕作 2013 『縄文土器の儀礼利用と象徴操作』アム・プロモーション
- 中村耕作 2013 「縄文土器の異形化と特殊器種の出現」『縄文時代異形土器集成図譜Ⅰ』2012年度國學院大學特別推進研究「先史世界における特殊器種・異形土器の社会的意義と象徴操作」成果報告書、國學院大學文学部考古学研究室
- 中村耕作 2014 「身体表現を持った土器とその考古学的課題—小野良弘氏所蔵の顔面把手・動物形象突起・顔面付土版を例に—」『國學院大學學術資料センター研究報告』第30輯
- 中村耕作 2014 「縄文時代後期における異形土器・特殊器種の出現と相互関係の研究」『高梨学術奨励基金年報 平成25年度研究成果概要報告』
- 中村耕作 2015 「瘤付土器成立期の顔面装飾と頭頂部表現—國學院大學所蔵の顔面装飾突起をめぐる—」『國學院大學學術資料センター研究報告』第31輯
- 花輪 宏 1995 「屋内葬考—類型と性格—」『考古学研究』第42巻第1号
- 林 謙作 1977 「縄文期の葬制(1)・(2)」『考古学雑誌』第2巻第4号
- 林 謙作 1979 「縄文期の村落をどうとらえるか」『考古学研究』第26巻第3号
- 林 謙作 1990 「連載講座縄文時代史7 縄文土器の型式(2)」『季刊考古学』第33号
- 春成秀爾 1974 「抜歯の意義」『考古学研究』第20巻第2号・同第3号
- 春成秀爾 1983 「竪穴墓域論」『北海道考古学』第19輯
- 春成秀爾 2002 『縄文社会論究』塙書房
- 春成秀爾 2013 「腰飾り・抜歯と氏族・双分組織」『国立歴史民俗博物館研究報告』第175集
- 樋口誠司 1989 「母胎としての住居」『DOLMEN』再刊1号
- 平原信崇 2011 「縄文時代後期の東北地方における香炉形土器について」『遡航』第29号
- 平原信崇 2013 「東北地方の香炉形土器」『縄文時代異形土器集成図譜Ⅰ』國學院大學文学部考古学研究室
- 藤井 浩 2003 「遺構及び土器の出土状況、接合関係についての整理」『八雲町野田生1遺跡』第1分冊本文編
- 古市豊司 1977 「分析と考察 遺構 (1) 竪穴住居跡」『水木沢遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第34集
- 堀越正行 1986 「京葉における縄文中期埋葬の検討」『史館』第19号
- 堀越正行 2006 「姥山の5人—住居床面葬の検討—」『新尖石縄文考古館開館5周年記念考古論文集』茅野市尖石縄文考古館
- 村本周三 2007 「北海道先史時代の火災住居跡集成」『セツルメント研究』6号
- 村本周三・高田和徳・中村明央 2006 「岩手県御所野遺跡における竪穴住居火災実験」『考古学と自然科学』53
- 村木 淳 2005 「風張(1)遺跡の縄文時代後期後半の土器と住居」『北奥の考古学 葛西勳先生還暦記念論文集』葛西勳先生還暦記念論文集刊行会

- 村木 淳 2008 「まとめ」『風張(1)遺跡VI』八戸市埋蔵文化財調査報告書第119集
- 山田康弘 2002 『人骨出土例の検討による縄文時代墓制の基礎的研究』平成12・13年度科学研究費補助金〔奨励研究(A)〕研究成果報告書
- 山本暉久 1985 「縄文時代の廃屋葬」『古代』第80号
- 吉本洋子・渡辺誠 1994 「人面・土偶装飾付土器の基礎的研究」『日本考古学』第1号
- 四柳 隆 2012 「いわゆる「廃屋墓」に関する考察(その1)―千葉県内の竪穴住居址から出土した縄文時代人骨分析から」『考古学論攷I』六一書房
- 渡辺 新 2006 「市川市姥山貝塚接続溝第1号竪穴―5人の死体検案」『千葉縄文研究』1
- 渡辺 誠 1998 「人面装飾付注口土器と関連する土器群について」『七社宮』浪江町埋蔵文化財調査報告第12冊
- 渡辺 誠 1999 「下部単孔土器の研究」『名古屋大学文学部研究論集』134
- 渡辺 誠 2007 「下部単孔土器と注口土器」『月刊考古学ジャーナル』No. 550
- 渡辺 誠 2008 「人面・土偶装飾付壺形土器類について」『史峰』第36号